

知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌 [ココナッツクラブ]

COCONUTS CLUB

April
2021

4

風雲！
河和城



風雲、河和城

KOWA



前号の山の神々めぐりに続き、今回も
「あまり知られていない近場の穴場探検スポット」を
取り上げたい。それは美浜町の河和城跡。
中世城郭マニアもビギナー戦国ファンも楽しめる
この史跡に、いざ出陣!

「お城山」に登ってみよう

ここ数年、城や戦国武将の人気は高まる一方で、城や城跡を探访する人が増加していると聞く。知多半島にも多くの城跡があるが、ちょうど十年前に放送されたNHK大河ドラマ「江〜姫たちの戦国〜」の影響で常滑市北部の大野城跡が注目を集めたくらいで、どこもあまり話題に上らないのが惜しいところ。しかし大野城跡以外にも、本誌エリアには気軽に見に行くことができて、かつ遺構も城を巡るドラマもなかなか面白い城跡が存在する。その代表格が、今回紹介する河和城跡だ。

とはいえ、日本の歴史上ではかなりマイナーな部類に入る城なので、地元以外の人はどこにあるのかわからない人が多いかもしれない。先述の大野城跡だと、山頂に天守閣風の展望台が建造されているのですぐ分かるが、河和の周囲は低い山が取り囲んでおり、下から眺めると、どれも城跡のように思えてしまう。

どの山が城跡かというと、知多厚生病院のすぐ東に聳える山で、地

市上郷)を本拠としていた戸田宗光が文明二年(一四七〇)に知多半島に進攻し、今の河和・北方あたりに上陸して砦を築いたとしている。さらに、美浜町教育委員会が河和城跡の登り口に設置した案内板には「渥美半島の田原城主戸田氏によって造られた戦国時代の城です」とだけ紹介されている。

文献によって違うことが書かれているので少しもやもやするが、中世の資料は多くないので、決定打がないのは仕方がない。ただ、三河発祥の戸田氏が河和城の祖であることは確かなようだ。とりあえず、その歴史がもっとも詳細に検討されている『河和城のおいたち』の文明二年説に基づいて話を進めると、三河上野の土豪であった戸田宗光が、室町幕府を二分した「応仁の乱」(一四六七〜七七)のさなか、同時期に知多半島と渥美半島に進出したのが端緒である。

それまで知多半島南部は、大野城を居城とする一色氏が支配していたが、応仁の乱に巻き込まれたことでその基盤が揺らぎ始めた。この機に乗じて台頭したのが三河の戸田氏と一色氏配下の佐治氏だっ

た。世は群雄割拠の戦国時代に突入し、戸田氏は三河湾側、佐治氏は伊勢湾側を領有し、両軍の対峙が始まった。…というのが大まかな当時の情勢である。

戸田宗光が河和の地を選んだのは、やはり地理的な要地だったからであろう。宗光は知多半島と渥美半島を押さえて三河湾の制海権を握ろうとしており、河和の位置はその最前線にあたる。主郭の広場の周囲には高い木々や竹が生い茂っており、今はほとんど眺望がきかないが、城跡入口の道路からは河和の市街地と三河湾、そして海の向こうの「三河平野」と山並みが見渡せ、往時をしのばせる。なるほど、ここは確かに知多半島の要所だ。戸田氏が目を付けたのも頷ける。

城跡の北側には新江川が流れている。これは河和城にとって天然の堀だったに違いない。今では河川改修でずいぶんすっきりとしているが、その昔はかなりおどろおどろしい雰囲気だったとか。昭和三十年に発行された『河和町史』には「お城のすぐ下に藍碧潭々として、渦を巻き見上ぐれば千歳の岩壁屹

元ではずばり「お城山」と呼ばれている。標高は約三十六メートル。裾野から中腹にかけて山を一周するように車道が通じており、山の西側には山頂に通じる六十段ほどの階段が設けられているので、行くのは簡単だ。

さつそく登ってみると、そこは東西約六十メートル、南北約八十メートルの平たい広場になっていた。その一角には「主郭」と大きく書かれた看板が設置されている。主郭とは、戦の際に大将が指揮を執る陣屋を構えるために整地された場所のこと。ここがまさに城の要となる。主郭の東側には横に長い盛り土が見られる。これは敵の侵入を阻むために築かれた「土塁」だ。そして土塁の向こう側は、高さ七、八メートルもあろうかという崖になっている。

その高さに一瞬怯みつつも覗き込んでみると、崖の下にも平たい空間があった。ちょうど主郭の南から西を囲むように伸びており、一角には「横堀」と書かれた看板が立っているのが見える。横堀は斜面に対して垂直に掘られた堀のこと。この高さでは、攻めてきた敵が

主郭に登るのに難儀しそうである。また、奥のほうには「曲輪」と書かれた看板も見える。曲輪は土塁や堀などで区切られた区画のことで、物見櫓や堀などが置かれ、城を守るための前線となった。

このように、素人目にも城跡の遺構がよくわかり、なかなか面白い。詳細調査した愛知県教育委員会の報告書によると、深い藪に阻まれて確認できなかった主郭の南側にも二つの曲輪があるという。

主郭には桜の木が何本も立っていた。おそらく地元の人たちが植樹したものだろう。本誌が配布されてから程なくすれば花も咲くはずで、城跡探索にはこれからの時期がうってつけだ。

その武将は三河から来た

河和城の築城年は諸説ある。『美浜町誌』には「長祿年間(一四五七〜六〇)のころ、田原から進出してきた戸田宗光により、知多半島東岸を確保する砦のようなかたちではじめられた」と記述されている。また、木原克之著『河和城のおいたち』には、碧海郡上野(現豊田

今なお残る城の遺構が戦国ロマンをかきたてる。

えておよそ百年も根拠地としてきた河和の地と領民に、深い愛着があったからだろう。

しかし、世の流れは守光と河和城を歴史の舞台から消し去った。信長の死後、急速に勢力を拡大した豊臣秀吉は、最後まで抵抗していた小田原城（現神奈川県小田原市）の北条氏を天正十八年（一五九〇）に攻撃する。全国有力武将が参戦したこの戦いに守光も加わったのだが、守光は小田原で討ち死にしてしまうのである。

さらに驚くことが起きた。守光戦死の報が河和にもたらされると、なぜか村人たちが河和城を襲い、城を破壊してしまったのだ。城主に不満があったのか、それとも裏で糸を引く者がいたのか？

城主不在の城には、守光の妻と嫡男・万千代がいた。母子は一旦野間大坊に逃れ、やがて叔母を頼って江戸へと向かう。妻は今の東浦町にあった緒川城を本拠としていた水野氏の出身で、叔母は水野忠政の娘・於大の方、つまり徳川家康の

実母である。徳川家の庇護のもと育った万千代は、水野の姓を受け継いで水野光康を名乗る。関ヶ原の合戦翌年の慶長六年（一六〇二）、家康から河和郷千四百六十石を下賜され、故国に戻って領主となった。その後、戸田改め水野氏は現在の国道247号河和橋の南東付近に広い屋敷を構え、代々そこに住んだという。

河和への帰還は守光の妻の強い要望により実現したとも言われるが、いわば追い出された場所へ戻りたかったのはなぜなのだろうか。もしかすると、夫・守光がやり残したことを息子に成し遂げてほしかったのかもしれない。それは、これまで前線基地として常に緊張の中にあった河和の村を、平穏な理想郷として発展させることだったのではないだろうか。武力衝突と権謀術数が渦巻く戦国時代、美しく豊かな里で民と共に生きた戸田氏代々が見た夢…。

謎に満ちた河和城は、そんな大河ドラマのような物語を夢想させる。

謎に包まれた歴史のドラマは身近な場所にある。

〈取材協力〉信濃山全忠寺

〈参考文献〉河和城のおいたち（木原克之著、美浜ふるさと研究会発行）／河和町史（河和町役場発行、美浜ふるさと研究会復刻）

愛知県中世城跡調査報告書Ⅳ知多地区（愛知県教育委員会編）／美浜町誌 本文編